



官  
刺  
孝  
義  
錄

卷  
六

武  
藏  
中

9  
1596  
6



1596



孝義録卷之六

武藏國中

孝行者表八

八八多入間郡落間村の百姓勤之清子なり年十二  
 四八以より江戸神田久右衛門町小座かりて見先と文  
 右馬といふなり十年をかりてあはしく文を思ふ  
 春米と高ひくむいふなり家産やとと  
 毎く及田所町より川上をゆきあはれ  
 少くして二十一年前より火災小つひしく  
 ありて八八より高きもとあけり年月まで屋う小

孝義録卷之六

法久しゆぬるれは長くもや仕とまなくは事とかが  
賢しくなりぬ事と人むつらうとくたとい幾後法と  
ひふもふふとあつて高人とてたつてんをわめくは  
と眼とらふと見たりふいとあまきつりまぬれは人  
乃家此家へふるといふもあつて人もふ事なう決ま  
も外は信ふといふ心かたつとつめとてゆつてひは  
教とおこさんといふ法全をもとら決文を思ふこと  
自らいふとて衣服又と古に裁とれの数と高ひは  
やうくしせける事と決をたつてありて文を思つて  
ふ事ありと十間坊七町目の家とよなとらふ事と此

後と公卿も多くと又市中に居るも山をわつて人の高ひは  
事だにまうせとて法八冬といふくつと決と志は事と  
母は六十九歳とたつて兄乃と法思つていとにあらと  
と後つ思ぬまくとあつてぬといふと決と事と人法思  
をてとつりこも店にわつたつては母を連へるとして  
もん事と決とたつてとつてとつてとつてとつてとつ  
文を思つていふといふと久しと法思つてとつてとつ  
りともたつれをわつてとつてとつてとつてとつてと  
彼と志をいふとつてとつてとつてとつてとつてとつ  
寛政四年六月町奉行小田切吉佐将よりいふとつて

長八主人此家のとどろへきり付初年よりはつて  
し忠義とされお外につくふかむとなくあま  
に在れいふとやちやと褒賞ありて銀をわ  
つりぬかきとり忠といひ孝といふまじくひとくた  
まこあふか新へし

孝行者百之助

百之助は江戸本郷金助町乃が里にすめかた八  
ふたりのりとは湯橋六町目よらとて鈴木善兵衛  
といふ浪人の子たりしつれし時より母に乳ふく  
庄八妻れりし乳をわくひくらあてりしより二歳

乃時庄八養ふとされしつれし時をくつ養ふ死し  
をれぬるし再婚せしころ今八使をよよしは百之助  
と名よるまにそころつ成長はるに志しつて公を  
こめむらつしつねよあらぬ友とむつれありし次は先  
やうなるしつて甚母れりしつね者より多病とな  
りしゆゆらあると百之助ふくられへし粟の比り  
いりしゆゆは夜重と名く母乃例よめりて極さすりつ  
まじく横の病乃はつて發せし時を頼乃ららもつ  
るゆららまはつて女抱し二使もつとさうひ初り  
去年十月の比より養父庄八といひつれし時を此養

物とて賣かほえし首買すれと必くして母乃  
 と病とてい茶のわら湯茶をす先食事とて  
 とせつ一日を怠らむか八酒を好むは後久  
 一とせつふたを病に費用と多かれは病者も  
 多酒をもつてつてめく使ひ事なりしと百  
 思ぬよりつけらめをそらて父病者人病者  
 なるはつ小病者つてつて思ひ病者高人の  
 了らぬとてつてつてつて利法よく酒をり  
 父つゆり事ふとまらして病者つてつて  
 何とせつてつてつてつてつてつてつて

如きとれ首にせむ守父母とも小病者  
 何人とも病者つてつてつてつてつて  
 月近隣乃り病者つてつてつてつて  
 何れとれ孝つて賞つてつてつてつて  
 池田義法守とせつてつてつて

孝行者市太郎

市太郎は江戸浅草材木町り店町とありす  
 六つ子あり源六つとは入野郡中野村乃り  
 十二歳にして江戸小島日花川戸町の者  
 何れとれつて二十一年つてつてつて





池田後信より九去傍う罪状沙とゆらるは志守  
 佐決希う忠死よらまうとつと省先彼う又へ  
 賜あうせんやと吉え一何申しにらうの九を衆志  
 是らるしにしもあう移ら官政四年八月はらう  
 なくゆらう父富左衛門より反復を下して佐決希  
 う尤と責し移らき富左衛門ハ武義園首飾如  
 幸々領長間村乃民をうとせ

忠孝者忠七

忠七反中と甲斐國郡内窪野郡戸之上村のきよ  
 嘉去傍うふたより安永三年北正月南松町より店

ありとあすり於甚右衛門とりふの娘一人生れらるり  
 あり忠七は此のつとせしと思ひて養子となすけ  
 けし甚右衛門ハ春米を高ひくあり園主乃敵の技  
 持米と養子とをそとの用をとりしれまうに  
 天明五年北より米の價をうとく思ふに換失あり  
 此の事より米あり下松町小店かりてすううあり  
 病多きゆれより米次のらう春米ありくう中風を  
 養てすれしゆめとたうらうは忠七親しくと老  
 りとかりて米一二俵つとをかういさうれ養米減ま  
 て世を渡さういさうもりむうけういさう



病あはれ片身かたてりり終つて酒を好  
 ちれとすはは心とされぬ人しと目しにゆらゆら  
 とくめ何事にもは次父母の言ふ志あはぬ志  
 ちらと年比つりしは借財をけくのひこくして  
 年五月南鍋町二町目の家主より春着をとりて  
 しか太き揚こつてぬれぬら小縁金にあはさる  
 けし人をはげまともころ用となあさく父母は  
 うま乃 僕まらしく貴くともあも電ともまら  
 けすまらく唐紙もけし人せ忠七の志あはぬ日  
 町の志あはれ揚こつてぬれぬら小父母は揚紙

まらぬとてぬらぬ風とけしし林あり地あり人あり  
 主人は服あはて安否とてし起居をまらすけぬ  
 高太き揚こつて事七年に後私の用となあさる  
 ぬらとて起と夜々其の別とてはまらぬとて  
 肉とてぬらぬりてむとてを前より又と体目と  
 小太きのもはけし保まらともあてともは  
 けしぬらぬらとて補むらとて柳の苦れを  
 揚紙の志あはれとて太き揚こつて主人の志  
 けしぬらぬらとて事あはれぬら夜よの志  
 けしぬらぬらとて忠七の志あはれぬら



とたりの男子は急を助ふことを希ふあくなりぬる年の  
 著弱込青町丁店切りしてはる今に姑と娘ととのこれ  
 とぞありけり夫のうせり後ををりたるたけとも  
 絶ともや佛よたてまつら橋と縁香がらりと敷人の  
 きり小賃縫して姑と娘と喜ぶ姑の自志ある上は  
 老きし向うたれいぬきとむ成つを世にりるはれは  
 一は中よと姑乃心ゆくりりは喜ひりり近里れめく  
 のそりていまる年も若けしは姑と娘をつとく人  
 直小喜ぶ娘く又ハ後乃夫をむい入をせらるはれは  
 かはなまやまうりりかすむじり母れものなとから

さし年とあつて孝義れるもあらし  
 とかくらひあつてはあつて夜食をりるはれは  
 うはあつて娘の新清もあつてはあつてはあつて  
 事もあるはれしは針活接摩れ業をたつては  
 けりさよう兄の上約は村清をりるはれは  
 くあつてはれは金後のますけもあつてはあつては  
 物たるはれしはけりは娘はく自のみく一は老めりては  
 ふ人のさうはれしはけりはあつてはあつてはあつて  
 いはれりるはれしはけりはあつてはあつてはあつて  
 世にりるはれしはけりはあつてはあつてはあつて

本通記よりいかにれきく町の役人役人申すは町奉行  
小田切右衛門とていふあけはあ寛政五年六月とりのり  
とてに銀を貸さう姑ら令らしくわたりて光をよきぬ  
なると杖おまると給りぬ

潔白者之之悪

江戸深川橋馬町小店町のてまらぬ佐平次とりのりも  
のめりおれ子とていふ車とりのり寛政五年十月十日  
意とくばは表格子の下とていふきん入のてれりく  
障入る身袋めりてとていふてれり金二分と南條の銀二十  
斤とていふてれり金二分と封しぬ

うとていふてれり金二分と封しぬ  
りれり金二分と封しぬ  
申あうとていふてれり金二分と封しぬ  
易ゆりやまらんとていふてれり金二分と封しぬ  
控まらぬとていふてれり金二分と封しぬ  
ちまらぬとていふてれり金二分と封しぬ  
あてていふてれり金二分と封しぬ  
富次町の借屋とていふてれり金二分と封しぬ  
といふてれり金二分と封しぬ  
小久へけりよとていふてれり金二分と封しぬ

小婿りしにけを又いけぬ酒肴のらきき祭  
 えむいさうよりきふころよせんこころあうけし  
 らせこえきさうめは物をむらひくと地をて抱あ  
 りとけへし半といひむらり似しとさあて  
 乃拾ひ物をもはらひきさるれは欲むしをれ  
 とさうくかき及さうしつたりのふくぬぬ葉の  
 業しとあをばらめはけり金しきりのあるはよ  
 年をとりけをそぬきけりし神みちりしとて根  
 を物りしは寛政の自三月小田切去佐所を以  
 のとれなるとせむ

孝行者市太師

江戸番徳町小店うてそ先於市太師の父は糖き場  
 けらりし野菜もれく同屋しき炭藪の中買をそ  
 志きりし切むよ父をさうし二月に孝病よりし  
 夏もよらせぬ病の中は食麦にむらりあ人  
 のよりしむし侍事なくその好めらものを地中り  
 あうねのきくのをんつらうしむらりあ人  
 小也市太師の御味せしむれを母乃煮たさきり  
 病者れは小かき入りしとて父あくなりし後ハ家業  
 せしむむむら小かきよのこありて志目にあ人々凡

西をきこむとて次暮ゆりて〜  
 齒は年七十二とあるは祖母二十八なりなれは  
 母十二小まはら廿四二十にちのせは婦をいへて  
 六人きりせしに店乃前るは河原又登菜れあ  
 賣し〜次お武と炭薪と〜所と志めを〜日と  
 の物又野菜れあ積り船の入来とと賣  
 ぶれりれつ〜と〜いふは〜  
 一人と船中又わつら〜船4つ〜  
 下りり〜先うけあ〜黄子〜  
 市志布

とい〜と〜は〜  
 何〜は〜  
 市志布〜  
 又〜  
 湖乃

かへゆきさへは物あらとていぢり車ちりく人もかうこ  
とに賣らうのいめくをうけを信じて高ひと父の  
附うりも物と違ふとせわれと町奉行小田切去  
佐守らうのきさの巻の何をもく寛政七年三月辰と  
あつくと給ものけり

孝行考 孫助

江戸幕府町奉行座相長相う仕切場小芝居りん  
人の出入改じがかりぬあり名は孫助とつふとの身は  
霊巖場演町又店切つてとて日おとすけ芝居  
りやとされ来り二あをいさしとせり孝の徳母の志と

や名といひて四十九歳とせられう六七年さけりう  
徴瘡をなしてさぬく醫療せり小芝居志けり  
わくといははとありうハ歩けりもあうりう腰と  
きぬと孫助がり物とて又飯うきうきとせ置  
食の法と二便りうは程をとりて一日は二つハ  
うりたらうりといははつて又又もは芝居り  
ゆさ目とれつと先をわけ次更しは申ゆを好む  
ものも来りあす先程とせたまのあらたよ  
かされることよとあひハけりたふとありたふと  
しつて母をたうとせぬし親しとせぬ

何とせしうのちとて身妻をとりらたの母とて其身を  
 先よりかまへておこしつゝはゆい母乃ちよむるも  
 不孝のちとたつる人くわく致貧しく中ふ子なきを  
 生れきりしんも、母れきんを徳とてうりもあふ  
 へくくけくは次芝居屋とてあつたはよめれ、  
 紙細工ちとてをぬいふ家とれおと出るもりたう  
 きく母の孝養よのち力とてせり、此うく町の者  
 のゆふるよゆせく寛政七年十二月小田切去佐吉  
 うりことあえとて銀を下くゆりもてはたや  
 同年八月の比日所塩町よとめり番屋を布た馬と

つふのあねを浦の隠居うり孫助孝ひ成きく  
 つくくくくをそくり錢一貫文をいへく事  
 あつしお孫助おのちこれるもれ、名はとて孫  
 らせしとてかてくくくは志保人うもあへくす  
 きたまけ信くくくくは志保乃孝心を録く  
 名とてくくくく孫助ゆりくあはくく孫  
 孫志をうけぬるやとあつとせらよはくく孫  
 ちあへくくをせおれをうけその旨と家正はく  
 家正うり名をぬる者と地くくくく  
 けりくくくくあつのみきかあつる大



やうかくれあうごあ

孝行者市太郎

江戸新永金町北町家にて母於六去揚る子  
市太郎この子の母母を養へるや母父のよ  
みくせこちこ十二歳あて下谷北邊の町家  
年次限うてなまやふ父と日ひうひく年お  
賣くくちやゆれくと勤の朝もみらく主人  
うり供くこまあぬるあをのく父と曰く  
すく油とらさるいうゆりもてあはれを任  
めこくお西あう今の家よりは出らう十一年前

はつらうは水出へけと父をうと女あ退り  
くは番財へる流しゆいといふはあまう  
多あうけれはむ書巻うたあ母後りてあう父も  
さなり入らぬあをを先母てハ軽れあの法  
まきくさうは高うをさうと遊さうあう  
く老うゆりあこれ市太郎をとりて力ま  
胡夕とて送らけりて六歳こころ七十八歳まで  
物と早ましくあうあうたせら風呂をよあう  
便よあうあもつれうを母火のいまうあ  
思ゆるや母烈しと費よいらさかせられらる

ても同じくはれぬのよゆつりては身は家よりく  
 父にこそ流ひ女抱せりて六三場とやくしつ酒と  
 ぬもつりさいはは志とくはれまふりしとく  
 ゆへみやとぬりしに市を舞うかみれ目しとく  
 けつと持てるおれ清さのくは首おととまひし  
 かつくあけけしハサのくぬぬりしとくハ市を舞  
 うら舞ひてゆえくさふおはくむさうのまひう  
 老乃樂とおれよ志と事らうしかりまひの  
 ちもさうのひとせえくこれとたよ心安くはて懸  
 と流ひ糸とを後ハまをえ流りて先をくともく先

ぬつり外に出る時を何事もまづ人をたやうり  
 志をくめまむあつりて人をも懸またのこてつと  
 夜より小出るよは食抱乃事火ぬゆにひある  
 まておはつもさうの六三場通さひくや、老むげと  
 女使もあやまらおげとるるたおくおりしと  
 人おも志らと流夜のつらよすは流とて人て父の  
 ひひりいさうはふ事かく世人の事もゆとと  
 ありしとてつ屋くきめのよは難いよとせうと  
 てさるよはとて寛政八年二月市を舞りて  
 せこまらば揚を六三場う命らうとくハ扶持



出んが目もくけしはつちあとして此窮苦をますけけ  
 かりこ念頃より人も友八も其志を感く強ふもさう  
 次くくまのたのめ物言ひ一つも忘りあへばさう  
 主人をますけぬるよめあど先うまかひひまは後流  
 とまふらう今私名に改めさそもあまのあまも若と  
 あり六年先よりぬと先も失くれまうこ忍んをも  
 ぬとさうりさあ入こさうり重てこのこめめくは入  
 かりあ後と酒肴めれたうあにをとされりて庵丁の  
 事と業とさせうさうまれ出入もさうらう次家  
 につあ志しそ今私養母のこよめいさうれむくさう

息んう酒をまめりさう物とさあかひまのまじさ  
 せりあひせり友八も回くや先うよをせうらう  
 業成つと先後と先う痛と看つとあくいさあ  
 仕立て小梅村乃父のりさふも食物をと推入あ安  
 とさうい夜を心代させうさう甲斐さうて回く  
 めんとさなも友八もあなめ今の養母も常に積を  
 さああうらうらうと暇も地獄をうと先うらう胡  
 起て食物とまてこり一日私をうくさう一重  
 さうらうれめさあ出るさあさうさう真実とさ  
 又は伊右あう実乃身清とさうさうのよめ友八のよ

多しに継母よつて人々を孝とせしむる葛飾郡須賀村の住人  
平十郎よつて人々を忠とせしむる又寛政八年正月町を以  
小田切と傳ふるより國之よきと見せしに後終るより徳兵衛  
と稱す

孝行者権吉郎

権吉郎は江戸中野所之町よと名を能治屋傳八より  
めり母と妹とありし大蔵乃以小傳馬と町は後家  
してより能治屋職之右衛門とありし小十郎季代と  
見ゆる母を奉ふよき事好し後妹とありし娘と傳八  
年まで病を人活しよとて六権吉郎惟るに職をとりて夫

かゝる世に生れしを得しと主人よと見しは又此家より  
病を看る事多しありしより甲斐とありしとありし六年  
まへ小死せりしよりて本所小島町よと名を能治屋と  
傳を種たりし勤の年季を明しよりしとありしとありし  
屋よりありしありしありしとありしとありしとありしと  
次より此主人之右衛門とありしとありしとありしとありし  
中して能治屋とありしとありしとありしとありしとありし  
母の家よりしとありしとありしとありしとありしとありし  
たは能治屋とありしとありしとありしとありしとありしと  
とありしとありしとありしとありしとありしとありしと

ともやんうふりたうとそくおふ志ある家柄の中を  
 川を流る隣とら小敷とかり母とうはくくく  
 心をともひ起居うりして二便のとり志まのをもく  
 いらくも藤書もつあうぬくぬれまおれりありの  
 結文よすも風呂をのこもつら真じりやとそして  
 角もひく板もや痛しやうをくらもくはくは後ハ  
 杖をののこもをささうらとらむひさうりにあれり  
 とも又権吉舟の叔父又吉舟とて神田新銀町の  
 色うつと先居るうらま久くく日代あくと年六十  
 小及志は舟よ志むる色うとらとたかす由ひあうて

後をあらく名代洋玄とらうらまの道心者といふのよ  
 かり市町乃門の立仲名をとらへ一文お後一つと  
 乃名代うけぬく世をまもむとらう早も外よあけり  
 りおふら終ら権吉舟の母の志よらぬゆめくおれり  
 く米と後ハ権太郎のつらうらも御つれとらけり  
 と次目この教こまをうり書はきりく不討の用あ  
 らんおおゆたうらとらにせよ洋玄もそれりう思  
 ひをわらげり夏を此夜をも種おつけく母の  
 ともこのうの洋玄おと涼切とらうらとらけり権吉  
 舟のまう一年うら紀のたれとらやと男れまうらひ

かの次職家の外は他より出らずもかく此に  
 母につゝ人諱言とも安らうしむる事のみと  
 けり然らうと云志をさうりありて居ぬ  
 町の事行小田切去侍舟半うけ給りて  
 浪を下り給りぬけと寛政八年  
 忠孝老甚太郎

江戸神田富心町二町目此の家より  
 十を請う貴子志太郎ありて神田松田町  
 りの子にて初名成甚太郎とありて  
 母と母ともいふ人ありて  
 今此十を請う親十を請の代より

今此十を請う親十を請の代より  
 を母母守子なまに其より若成も甚太郎と改め母は  
 外に奉とせられたる日を送ぬる志  
 あり母多を安らうとけり  
 乃代地より家をわけて住せ  
 甚太郎、給ちの内をりく  
 其より母中風れ安らう  
 母とらは、徳業の味より





事とのこととされは其月乃より定めん事ハ  
もてと思ひしより其のさかたか忠孝乃行ひや  
こめのよりつらうとてさく巷の役もあつて  
寛政八年の夏町奉行小田切土佐守より其事  
せえらうは浪をせしめ甚と命を告ぐ  
給ふ

孝子者庄助

庄助は江戸神田花房町より家へあつて其六  
うふらうと十六年正月神田仲町一町目の地主役して  
村本はあれうと長を馬つとつて其娘一人と吉次郎と

いふ初子とありききあつて多病を役もはたせらる次  
とてと娘に嫁つてさくさく福のちんこつと媒め  
りあつて名成もせしと改姓をせつて其の生れつ  
は篤実少とあつて母に孝をそとせしつて  
こ町役ともつと免あれりともさけとあつて  
睦しあつてつ次乃とあつては甚母の娘を  
いふと其後の事とせりなうとせし吉次郎もやんと  
あつてつた高ひ乃道と町役もたつてつと  
六度あつて其七と吉次郎と順養子にせん事とせし  
り甚父母と實れりよあつて其事ありあれり

いせらとて、皇恩を親族ととおぼせりては、由り  
 町役も吏居も、儀り又、事七と右の、を、善、良、父、事、七、と  
 今、乃、花、房、町、と、別、に、町、と、別、に、し、り、と、花、房、の、花、房、と  
 う、り、竹、あ、は、た、ま、と、事、と、い、う、と、光、る、ち、あ、り、と、い、う、と、  
 善、良、父、の、家、と、い、う、と、付、き、ら、家、業、を、勤、め、と、い、う、と、  
 他、と、い、う、と、事、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 ち、あ、り、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 つ、ら、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 と、又、か、ま、り、と、い、う、と、い、う、と、養、父、母、此、を、推、し、と、い、う、

い、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 ち、あ、り、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 け、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 ち、あ、り、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 別、の、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 ち、あ、り、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、  
 父、母、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、い、う、と、

を以てなりしことらぬ事かほなきよき事なりしや  
寛政八年町奉行小田切吉伝るを以て事実はも  
紀くしやれどもよく後庄助よりと申す所の銀結  
りけりなりし

貞節者として

江戸小石川傳通院の首白雲町より西へ伝家して  
とめか孫七としりぬあり大工の業をたうしてあり  
しう曰く是れより徴瘡をやりて母をくはさへんか  
ま次家乃業とありしやれりて歎しくぬありゆはれ  
とて此妻と死しりしやめ心海先やに正しく

物らく起て食ふさうの佛よりそさうら椿の葉と抹  
香とさうりしやふかくぬきさうり金とあり日人乃  
衣のあり金とさうりすら衣にありありかきぬきさ  
りしやれり後小とぬきさうり利をひきやり次より後  
れと文乃とぬきさうりけ九りしやれりつねとりの娘  
と七つしやれりしやれりしや書女まくり金とぬき  
りしやれりしや孫七の母と同一しや書女とりの所  
小すしりしやぬきさうりぬきさうり賜り物高  
るしやれりしや物とぬきさうりぬきさうりぬき  
又及家の志日しやぬきさうりぬきさうり此布施を



其二葉に於けるは北島町たるる傘張与八つりたり  
 其の業を専らとせり年を限りては久しきなり  
 小の業よりさきくユナリしうは主人もあられみだ  
 多しとて先づつひ年季ともかくも礼なまらぬ定  
 のれおまをとははら先くけ之月龜鶴町の仮家  
 よりつひは位母とせりせめれ父乃改りて悪  
 心せりつらとむしり胡とて記てあそくとて假  
 といひてきく父よりさきめ托鉢の修りしめとせり  
 つねに傘法事と業とせりて世に成りてはつり父の  
 二人の子とありしは兄かんと清次ハ女子次と年次を

二人ありあれも又さき志田なるる六姉尊をそのとて  
 綿うの事と業とせりつらつらとせりつらつらとせり  
 ちねんせりての業をせ減やんとて廻國修りをもな  
 さんと思ひしは主領と忠玄清いなりとて入りたり  
 つら居しうは此用此費主人より助けしとせり  
 かくと後こひてわらね中子ハ後ちう人せりともあり  
 其の時をさきとせぬをふり附まそものなりとて物  
 人よりさきとせりはと先二年なりとて此費をも  
 僕ひしうとせり主人と彼り志を先せりあつり此人  
 たりとてせりてせりては龜鶴町ハ家ありてつら

あも日用のりか半かけさるわうにとらるゆま  
 るいきつらう慧を日とに修治は出くゆ  
 まり付て必出遠入てまをい帰る市の風音  
 ゆくとれをつさういりまはら流を垢らりけ  
 ぬ降ハ牽らうおわい或はまどをせらり  
 日くつたれのぬかりととせぬれは親くは  
 人のぬれ油障子すと破るぬ半にれハかこは  
 糊のそららとれとらよ絡ひ又と骨となをせ  
 行乃ぬまうらに道ハ唾壺火吹行やうのりぬ  
 修り竹の骨ぬけらく寛乃下たれつら料ま

ろうられ家くに徳りいさうかぬまなる男りて  
 老をら父を喜ぶよ通と人のことまのるもあ  
 是らとのぬれをいじくまらうとと人くはれ  
 かり魚と賜とらけと又う法乃道より精を  
 してありとととらとらうまらうととやとらまら  
 海よりとらぬれを後ハとらにぬらうととせらるる人のも  
 とらとら時若らうととやとらぬらうととせらるる人のも  
 百文ハ母れ養あるに徳り百文ハ弟ありととららとらけり  
 とらら主人のをぬれ死やうけと妻ふんじらう  
 志ま流らうととららぬのなれハ我されあたらうも



へたうとあり総國國者とりて又よ主人の志ありぬ  
 是は良業をたのむる身の人故に又はく人て  
 夫等の徳をとりて良業に功せしむる事なり  
 良業日夜に理を講を慕ひいふはとなくあり  
 之にふりぬ理を講も今とてあは入る方に  
 乞ひ下谷焼明とて之を寺に裏に置く事なり  
 猶もて良業とてとせ日とて人になとされ  
 とは債後とてとせ日とて人になとされ  
 うにもあうとて思ひて後世の徳にあり  
 しくよ也義子代の小改は白坂法部を為るものなり

理を講うつ移し海峽やうなる事ありあはふこれを用  
 んと次日とて小徳を中りて物にあり運ぶ小  
 揚とてふものありとは数二百人定まらるる人た  
 移る日十六年正月に奉りてありてそ缺るるを  
 補ふ小揚の事なりとてひりて理を講とせりあり  
 てはまふとて禮物とて勤も南に徳人にしそはふ  
 奉行乃れも引とて小揚の事なりと進退とて杖  
 突とてふものなりとて杖突乃れものありとて  
 知らせしに理を講いありて杖突乃れものありと  
 ともはれとて良業の事なりとて杖突乃れものありと







乃水よりあつたふらぬ村くふらふらと東らつ決  
 きつらつら此のふらぬ村のふらつらつら水も退き  
 むらぬ人ともゆらぬらつら父はまらけつらあつた  
 たらぬといふく孫助を志はつらつら此の新田に  
 とも免る貴民とらつら孫助をたけつらあつた  
 事たつらつら此年と國の東はまらつらあつた  
 此は免ふあつたつらつら此限つら人乃門つらあつた  
 抱えつら教多つらつらと此新田を皆孫助の助に  
 うけつらつらつら事もあつたつらあつた  
 村のあつたつらつら者もあつた孫助のつらつら

似たつらつら孫を其下にまらつた貴民はもつら  
 孫助のつらつらつら村長あつたつらつらつら  
 そつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 種叔乃料つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 たらつら孫助のつらつらつらつらつらつらつらつら  
 此七つらつらつら父乃種はつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 たらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 たらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 たらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 たらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

及子りておれと見よむいひしうとあたまけく老らば  
 てを後よきういふ事後或は米穀雜穀よりて於  
 けて利是とていふ事と死らく飯や入る人それゆ  
 送くつくの事よりうらうらとてかく男女は死  
 ら次いふいふとてそのあまう家におくいふいふ  
 事をしてを貸付をはかりてよちかくにつくの事よ  
 りくをけけつ又田のこあくといふ死よいふ事より  
 あつとあ父控をいふとめいふとを後よきといふ  
 知ともいひくといふもいふ人をいふ乃其物とて  
 種なきより乳智おれんを細り利をいふいふの事

若一人は六十日病つて死なむといふ事ありて  
 うれ其物のいふいふの事とて孫母の代とていふ  
 又うれいふといふ事ありていふ事ありていふ事  
 以ていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事  
 凡二百日病の経日とていふ一人は病つて死なむ  
 あつといふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事  
 此日百二十人といふ事ありていふ事ありていふ事ありて  
 田を八分あつといふ事ありていふ事ありていふ事ありて  
 孫母といふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり  
 二ある其のいふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事

せたくい支食のこころみをもめぬくよそあ新  
 白乃氏よりわらうとてさうさうさう下能やうのれく  
 貢と名録物の方より毎納く極書れ氏より入  
 後七百又二斗二升つをわかしあし入を村より  
 とあつわさうれまうしれ共よりさうさうさう  
 あしめさうの利よりさうさうさうさうさう  
 とはしめさうの利よりさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさう  
 とさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさう

一代之刀帯する事と由致く子孫乃未まで  
 苗字名系らせよとて作更さう是ゆねは十二  
 月乃さうさう

孝行者之古事

与志出と秩父郡前田村の百姓より与終より二斗  
 飯と持く母と共と子供と入をさうさうさう  
 けらるる父の長き壽とさうさうさうさう七十八歳  
 て身うせぬとて鶴膝風を病く十五年う終より  
 らさうさうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうの合物とさうさうさうさうさう  
 耕作より出さう



父にせうし後之れをわづれ忘自さしつて其まゝくひ日かゝり  
 暮宿しつゝ寒小い由とて姉に祈ひまうその後  
 母も病者とてたりの方さうは寝痺まじく自をた  
 らめとて瘰癧を忘りたうく瘰癧を乃あけとて父  
 母よつとれ半をり一卯年をりこれらうらうら  
 けとて年をもたれぬまうよひくゆりてふ成り  
 さひ朔夕の夫食まじに絶くたうらうらそ身ま物  
 と子供とを忘りてふ弟に根をも忘りてふ木の葉  
 たうくわとて由とて糧とすれと母の料をいさうと  
 もようれをえりてあうらうらめ神もまじりてふあひ

又世次とて母は七十八歳よされとも程うるむり飛  
 びを母のむすこ兼長子の二十二歳あつともい農子  
 を勤と娘と十四歳末女子八歳いけきもなうら  
 たうら生れつとてよく親乃孝心をうけつとあもり  
 己の身命に舅姑の礼をそとめう半全くと  
 右馬の孝初の徳よとれうとつて人くわとてうま  
 しけきとて乃貢りうく乃役をたうら半をく  
 けら山中小住うともま告行つらふとれは此  
 の由代告萩東泳をまはうはあそらあくとあ  
 了り復とてとてゆりてあを政えあひのうあ

年をうりし

忠義者之助

兵助は是立郡高桑名乃百姓と申次郎下男也  
 二十八歳ありしは父の年平次也よありし比の  
 甲年限つとてさうくをせしうを限り満くと  
 申次郎の屋敷我妻久しく病くありはと志く  
 して止りしとて助を留めしうとてさうく使てま  
 ちよとありし時より後よと申次郎も病も高より  
 て老うししとて意を絶つしとてあやれしけしと  
 終りしとてさうくぬとてふに今の年平次はとて

万歳とてく十歳をうりにありけり父を葬み入る  
 よ次郎の主人におうりく納せりしを後親族ら  
 らの事や致しうりし先日に高木物よりとて  
 て合入りててりしとてさうく八十五とありし  
 借金負ふふと六百二十とありしとてさうく  
 身よりくけ敵を絶くしとて是れさうけしとて  
 可成ると伯父ならむとてさうくさうく家をも  
 ともさうく人よ借とてさうくさうくさうく  
 七十五とありしとてさうくさうくさうく  
 一とてさうく家財と離教しとてさうく



ざらぬをばしん恨み思原らたすれと一旦はあを  
 預りぬ乃まじし高ふしてみよわく恙をれども  
 後さうしていせもあつてもあつて終人と傳ら  
 西きくといふれとつねよ去物う書実らうにうり親  
 族もさうけつせくも後川のゆとあまうせう  
 さあま助の万歳とさういふ乃復めあらあたり  
 以て事れあうさ馬をうさう語うかく世を終人  
 きものもいけあつてさあ乃無庵と共回金く  
 乃とすうりうとさあつていふ終とたれ人くそ  
 誠と感一年候とくいふさううらうと臣候と

物をさう高ふ物とさううらうと臣候と人くそとさ  
 けあつてた又とたあつて人くさう借給いと  
 も始のいふい終とさあつていふも年候とさう成  
 とさあつていふい終とさあつていふも年候とさう成  
 借もさういふい終とさあつていふも年候とさう成  
 あつていふい終とさあつていふも年候とさう成  
 家臣今まうこれいふとさあつていふも年候とさう成  
 母九年あまうりなをさう十七年とさあつていふも年候とさう成  
 う程とあつていふい終とさあつていふも年候とさう成  
 まく此人をいふさう後いふとさあつていふも年候とさう成





けり多くれ費とさうしつ費より海りしつをうゆれ  
 田畑とも皆去りしつとあ火災より入あひくぬつ  
 くは半りぬを次りゆせぬ炭をうりて母と娘とを  
 合せあふ人使とらふり日くすれ後物あふ鶏卵  
 ちうと高ひしつ那う價を海くせ成しつてぬ  
 されと娘をぬりしつとぬく母の昔のむし任とぬ  
 事多くとく四五十年とありしつぬお戸ふなむせとぬ  
 今ハ母ことぬとありしつと高ひしつとらふかてぬ物  
 飯を個くすつ先直飯のとあ入まてあつとぬとて  
 母の氣色を何ひく高ひしつとあももとあくとぬ

海りしつあつてつと母も利を海き日くぬとぬと  
 かくつとくがとぬ利分あつと日ゆせとぬとぬと  
 かくつとくぬとぬと寺指とぬとつと入とぬとぬと  
 とぬとぬととぬとけぬ屋とつととぬとぬとぬと  
 て湯とぬと村乃用とつとやむ事とぬとつとつと  
 和つとぬとつと分れぬとをぬとぬとぬとぬと  
 ぬとつとぬとつとぬとぬとつとつとつとぬとぬと  
 食物とぬとぬとぬとぬとぬとつとつとつとぬと  
 ぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬと  
 麦飯の中に菜大根芋やうれぬのをつとぬとぬと

母は米のこを食せ又ぬり殺めぬはさうあをて  
 次はつらうちの品あらぬ母れふ小叶とて思ふ  
 とは艱難をいつは末あへんあよまう録とて  
 うれ味むらぬのあれはさうと母うとておろの  
 ぬまうふよ去年より病おどりの日板枕よつと  
 くありたれは食物をいじりあををめまうしてむと  
 る身の手あれと助らむとやとせとてさうい  
 といぬく着痛せしう日くは高くとはしてさ  
 とれたるもさうかぬとさうかた助七を殺とて  
 くにあてしむらうけりまぬとさうかたけり

を易く思ひてい高くとりさういじりも早く海つて  
 英吉をさういぬれは殺せとていぬれは殺していぬれ  
 とさうい今は夜起さふかしてうけとて甄をい  
 けりさうい二使をとり衣後乃さういさうい  
 夜もいもあへんいさわぬをいけりさうい  
 娘とて音病のまをいさういいぬれは殺していぬれ  
 のみ経とてあま乃價をさうい母は食物た小娘  
 うれとてい人よさうい母のまをいもさういぬれ  
 してさうい娘はつらういさうい又あををいさういぬれ  
 火とあつて助七うぬれとてあまのりをうけりさうい





